
ロケット団員の旅

赤い小惑星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロケット団員の旅

【Nコード】

N7979D

【作者名】

赤い小惑星

【あらすじ】

ここはポケモンと人間が共存する世界・ポケモンとともに成長する正義感を持った少年がいれば、冷酷な心を持った少年もいる。これは冷酷な心を持った少年がロケット団員として活躍する話である。

1・旅立ちの日

「ロケット団本部」

「バイパー教官、何か良い人材はいたのか？」サカキが聞いた。

「要するに幹部候補ですね」

「そういうことだ。で、ロケット団Aクラスナンバーズ009候補の人材はいたのか？」

「ええ、まあ約一名います。彼らは今までやってきたロケット団特別訓練所の中で一番の優秀な生徒かもしれません。」

「そうなのか？」

「まあ、見て下さい。おい、入りたまえ」

「失礼します、サカキ様」

「こいつか、以外に細身で美形だな・・・しかし、眼だけは冷酷そうな眼をしているな・・・」

「ありがとうございます」

「で、こいつのどこがすごいのだ？」

「こいつは、最終試験を初めて完全クリアしました」

「最上階に到達し、赤いカビゴンのおりをへりにセットすることが出来たのか・・・しかも一人で・・・」

「まあ、ひごずりながら最上階に持っていったんですがね」

「どちらにしろクリアはクリアだ、ところでお前のポケモンは何だ？」

「タツベイです」

「珍しいな、ところでそのタツベイは道具は持っているのか？」

「いえ、持っておりません」

「じゃあやろつ、りゅうのキバだ、これでドラゴンタイプの技の威力が上がるぞ」

「私なんかに渡して良いのですか？」

「お前には才能がある、だから貴重なポケモンを捕獲し本部に渡し

てくれると信じている」

「はい、頑張ります」

「ひとつ質問良いですか？」

「何だ？」

「途中、ジム戦に挑戦しても良いですか？自分の能力を確かめるためにも・・・」

「いいだろう、特別に認めてやる。もしセキエイリーグで優勝できたらロケット団Aクラスナンバーズに任命してやる」

「ありがとうございます」

「では、ここにロケット団として活動するよう辞令を下す」

「はい」

「そういえば、名前を聞いてなかったな、何と言った？」

「シヨウです」

「シヨウが頑張ってくれ」

「はい」

ガタッ

「行きましたね・・・」

「ああ、シヨウがロケット団を変えてくれるかも知れん」

「私もそんな気がします」

「ただでさえ、最近は任務を遂行できる部下がいなしな・・・」

「これで幹部達や下っ端が奮起してくればいいんですがね」

「ああ」

これはロケット団新人団員 シヨウの成長の物語である。

1・旅立ちの日（後書き）

初めての小説です、よろしくお願いします。

2・初仕事はトキワの森(前書き)

シヨウは本部を出発し、トキワシティに来ていた・

2・初仕事はトキワの森

シヨウは本部を出発し、トキワシティに来ていた・

「ああ、腹ごしらえもすんだし、出発するかタツベイ」

「ベイ！」

「あ、君も目指してるの？ポケモンリーグ？」

「まあな」

「そんな言い方はないんじゃない？」

「まあまあ、マリナちゃん。ケンタもこんな子ほつといてどっか先に行こうぜ」

「ケンタ、マリナだと？」

「ああ、ちなみにあいつはジュンイチだけど」ケンタが言った。

「お前から、ライコウ捕獲を邪魔したヒーロー気取りの少年は！」

「その口調、お前は・・・」

「ああ、ロケット団員だ。まさしく」

と言って、シヨウは私服を脱いでロケット団服になった。

「君は黒なんだ・・・」

「ああ、お前達が会った、ブシヨウさん、ブソンさんは特務工作部所属だからな。制服は灰色だ」

「でも、制服の形はバシヨウのと一緒だな」ケンタが言う。

「僕はブソンの服のほうが好きだな」ジュンイチが言う。

「でも、どこにでもいるのね、ロケット団員って」マリナが言った。

「でも、なんでロケット団が挑戦するのさ」

「優勝して、世界にその強さをアピールするのだ」

「ロケット団なんかが出たら、ライコウの時みたいに倒してやるよ」

「ああ、そうそう、ライコウは逃がしたけど、バシヨウさん達はレックウザを捕獲したぜ」

「なに？」

「ふざけんな、お前らみたいな奴には負けねえ！」

「ライコウを守った時みたいにお前を倒す」

「お前らも挑戦するのか？ポケモンリーグ」

「ああ、そうだが」

「もしお前らと当たったら必ず勝つ！」

「その前にお前がバッジを8つ以上獲得できるかな？」ジュンイチが言う。

「その言葉覚えている、行くぞタツベイ！」

「ベイ！」

「威勢だけは良いけどね・・・」マリナが言った。

「ああ・・・」

「どうしたケンタ？」ジュンイチが聞いた。

「いや、もしあいつが出たら脅威になると思ってたさ」

「考えすぎだって、あんな奴出られるわけないじゃん」

「もし出たら、ライコウの時みたいに迎え撃って倒せばいいんだ」

「そうだな、じゃあ俺たちもそろそろ出発しようぜ」

「ああ、そうだな」

そうしてケンタ達も旅立った・・・

（ポケモンセンターの一室）

「今日はここで寝るのか・・・」

「ベイ（そうだね）」

「そういえば、奴らのことを報告しておかないと
そういつてシヨウはポケッチを取り出した。

「サカキ様の番号はこれだなっ」と

トウルルル・・・

「サカキだが、ああシヨウか何かあったか？」

「いえ、ご報告があまりまして・・・」

「何だ？」

「ライコウ捕獲を邪魔した奴らを発見しました」

「それで」

「奴らはセキエイ大会に出場するようです、これで私の目標が見えました。奴らを倒すのです」

「それで優勝すれば、ロケット団は最強という示しが全世界につくというのか・・・おもしろい」

「ですので、元トキワジムリーダーとして何か教えていただければ・・・」

「うむ、まあ強いポケモンをバランスよく捕まえればそれでいい」

「なるほど。やはりそうですか、私もそう思います」

「あと、珍しいポケモンを見つけたら直ちに捕獲しろよ」

「分かっております」

「じゃあな、吉報を待ってる」

「ではまた今度」

そして朝・・・

「さあ、出発だ」

「ベイ！（おう）」

「ここを越えるのかだりいな」

シヨウはトキワの森に来ていた。

「しかし、ここはくさ・むしタイプがいっぱいいるんだろ？」

「ベイ（そうみたいだな）」

「しかし、これだけ広いんだから強いポケモンがいるに決まってる、そいつをゲットし本部に送って新しいポケモンを支給してもらおう」

「ベイベイ？（仲間が増えるの）？」

「ああ、そういうことになるな」

「ベイ（早く行こうぜ）」

「ちょっと待て、ゴールドスプレーをしてからだ」

「ベイ(なぜ)?」

「これをすればポケモンは近寄らない、もし近寄ってきたらそいつは・・・」

「タツベイ(強いポケモンか)?」

「そういうことだ、じゃ行くぞ」

↳トキワの森

「すげえなこのスプレー、全然ポケモンがよってこねえ」

「ベイベイ(そうだな)」

「ダネダネ!」

「おっ、ポケモンが来たぞ、あれはフシギダネか!」

「チコチコ!」

「キヤモキヤモ!」

「ナウ!」

「チコリータ、キモリ、ナエトル・・・近寄ってきたのは初めてもらうくさポケモンみたいだな」

「ベイベイ・・・(そうみたいだな・・・)」

「これをボスに渡せば俺のイメージはうなぎ上りだ!タツベイ!」

「タツベイ、フシギダネにずつきだ!」

「ベイベイベイ、ベイ!」

「ダネ」

「やった、奴らまだバトル慣れしてないぞ、この勝負もらった!フシギダネにとどめのりゅうのいかりだ!」

「ベイー!」

「ダネ」

「いけモンスターボール!」

ピポンピポンピポン・・・ボン

「よし、フシギダネゲット!」

「ついでに、あの三匹もゲットするか、タツベイりゅうのいかり!」

「ベーイ！」
「チコーッ」
「キャモ」
「ナウ・・・」
「よし、いけモンスターボール！」
「ピポンピポンピポン・・・ボン」
「三匹ゲットだ、レベルが低かったから早く捕まえた、良かった」
「ベイベイ(そうだな)」
「じゃあ、ちよっとトキワに戻るぞ、ボスに報告する」

トキワシティの某所

「サカキ様、報告があります」
「ブチッ 目の前の画面にサカキとペルシアンが映った」
「早いな、どうした？」
「ポケモンを四匹捕まえました」
「何だ？」
「フシギダネ、チコリータ、キモリ、ナエトルです。トキワの森で
ゲットしました」
「ほう、やるな。珍しいポケモンばかりじゃないか」
「では、早速転送します」
「うむ、よろしく」
（一分後）
「うむ、届いた。ご苦労だった」
「はい」
「ところで報酬だが・・・この中の一体を支給しよう」
「いいんですか？」
「いいんだ、初めてにしてはすごい結果だからな。いつもほとんど
の団員がここでリタイアするんだ」
「そこでリストラするんですね？」

「ああ、そうだ」
「という事は、俺はクビにならずにすんだんですね？」
「当たり前だろ、でどうする？」
「フシギダネでいいですか？」
「フシギダネか、いいだろ。では転送する」
「届きました」
「うむ、じゃあこれからも任務に励むように、じゃあな」
「はっ」

そして朝・・・

「さあ、出発だ。タツベイ、フシギダネ！」
「ベイベイ」
「ダネダネ」
「もう九時をまわっている、急ぐぞ」
「ベイ」
「ダネ」
「うむ、その意気があれば、ニビシティにはすぐ着くだろう」

そしてニビシティ・・・

（ニビシティ）

「やっと着いたか」
「ベイ（だな）」
「じゃあお前達はモンスターボールに戻れ」
「ニビジムに挑戦か？」
「誰だ？」
「この住人さ」
「ニビの？」

「ああ」

「ニビの人が何のようだ？」

「相手の使うポケモンを教えようと思ってよ」

「ほう、いわタイプの使いだろ？」

「そのポケモンは分からだろ」

「ああ」

「ゴローニヤだ」

「ほう、じゃあお前の出番だ、出て来いフシギダネ！」

「ダネダネ」

「フシギダネか、珍しいのもってるんだな」

「まあな」

「じゃあ、頑張ってきて」

3 ニビジム(前書き)

シヨウ達はついにニビジムに挑戦する日がやってきた・・・

3・ニビジム

「このジムリーダーはいわポケモンの使い手で名前はムノーというらしい」

「ダネ(うん)」

「そして新しい情報で、使うポケモンはゴローニャとさっきの人は言っていた」

「ダネダネダ(うん聞いた)」

「だからお前なら楽勝だ、いくぞフシギダネ！」

「ダネダー(おう)」

ギギイー

「ニビジムへようこそ」

「あんたは？」

「ジムリーダーの次男、ジローだ」

「次男でジローそのまんまだな」

「でも、長男はイチローじゃないよ」

「そうなのか・・・ってそんなのはどうでもいい、ジムリーダーはどこだ？」

「おお、ようこそ。私がニビジムジムリーダーのムノーだ」

「そして私がムノーちゃんの妻ミズホよ」

「母さんは別に出なくてもいいよ」

「別にいいよミズホちゃんはきれいだから」

「ああ、ムノーちゃんもかっこいいわよ」

「あの、ジム戦は・・・」

「ダネダネ(まだかな)」

「これは失礼、すっかり忘れてた」

「おいおい・・・」

「ダネダネ（こんなのがジムリーダーで大丈夫なのか）？」
「不安だな」

そしてフィールドへ

「これより、ジムリーダームノーとチャレンジャーシヨウによるジ
ム戦を行います」

「いけ、ゴローニャ！」

「頼むぞ、フシギダネ！」

「試合開始！」

「いけゴローニャ、まるくなるからころがるだ！」

ゴロゴロゴロゴロ

「フシギダネ、つるのムチでジャンプ！」

「ほう、サトシくんと同じ手を使うか」

「フシギダネ、はっぱカッター！」

「ダネダネー」

「ゴロゴロー」

「ゴ、ゴローニャー！」

「効果は抜群だぜ、そのまま決めるぞ、つるのムチだ！」

「ダネダーツ！」

ビシッ

「決まったか？」

「そんなんできまるほど、弱くないぜゴローニャは！ゴローニャじ
しんを発動せよ」

グラグラグラ・・・

「つるのムチでジャンプ！」

「ダネダネ・・・」

「チッ、じしんでできないのか・・・」

「今だ、まるくなるからころがる!」
ゴロゴロゴロ・ズガアアン
「ダネーッ!」
「フシギダネ!」
「一転劣勢だな・・・」
「チツ、レベルの差がでたか」
「とどめのじしん」
「どうにかして奴をとめないと・・・フシギダネくさぶえだ!」
「な、何!くさぶえだと!ゴ、ゴローニヤ!」
「遅いぜ、もうゴローニヤは眠ってるぜ。フシギダネ、やどりぎの
タネ!」
「ダネフツシ!」
「ゴロー!」
「ゴローニヤが起きちまったか。まあいいやどりぎのタネは命中し
たしな。フシギダネはつぱカッター!」
「ゴローニヤころがる」
「すげえ、ころがるで避けてるよ」
「ゴロー!」
「でも、やどりぎのタネのダメージが・・・」
「いまだ、はつぱカッター!」
「ダネダネダーッ!」
ビシュシュシュ
「ゴローニヤ、ころがるでかわすんだ!」
「ゴロー!」
「フシギダネ、つるのムチでゴローニヤの動きを止めるんだ!」
「ダネッ!」
ズズズ・・・
「負けるなゴローニヤ!」
「すごいなあ、フシギダネ」
「ゴローニヤに勝るとも劣らないぜ・・・」

ズズズズン

「と、止まった!」

「すげえ!」

「フシギダネ、はっぱカッター!」

「ゴローニヤ意地を見せるじしん!」

「ゴローツ!」

「やどりぎのタネのダメージを忘れないでくれ!」

「ゴローツ!」

「ゴローニヤ!」

「これで終わりだ、とどめのはっぱカッター!」

「ダネダネーッ」

ビシュシュシュ

「ゴロー・・・」

「ゴローニヤ戦闘不能!、よってこの勝負トキワシティのショウウの勝ち!」

「ま、負けた...」

「よっしゃー!大事な初戦に勝ったぜ」

「仕方ない、グレーバツジを君にあげよう」

「あっどうも」

「まあ、これからも頑張つてな」

「言われなくてもそのつもりだ」

「そりゃそうだ」

「じゃあな、俺はもう行くんで」

「行ったか...あいつ本当にポケモントレーナーを目指しているのか?」

「僕に分かるわけないじゃん」

「そりゃそうだが」

「まあ、負けた俺があいつに言うことは何も言うことは何も無いがな」

「でもムノーちゃんも頑張ってたわよ」

「ありがとうミズホちゃん」

「負けたら意味無いんじゃない？」

「いや、トレーナーの良い所を引き出すのもジムリーダーの仕事だ」

「そうなんだ」

「まあ、勉強になったんじゃない？」

「うん」

↳ニビシティのロケット団事務所↳

「サカキ様、何とかジム戦勝利できました」

「そうか、よくやったぞ」

「はい、それで褒美は？」

「褒美だと!？」

「い、いえ何でもやりません」

「褒美は、ジムバッチ八つそろえてから与えようと思ったのに・・・
まあいい、欲しいのは？」

「強いポケモン、即戦力です」

「即戦力か・・・あ、そういえばコイキング!」

「サ、サカキ様、コイキングはちよつと・・・」

「いや違うんだ。お前特別訓練所の池でコイキングを育ててただろ」
「ええ、まあコイキングの軍団でしょ。あいつらオレにしかなくなくてね、しかも俺のタツベイとも仲いいし、それでバイパー教官に世話をしてくれて頼まれちゃって・・・」

「そのコイキング達のボスがお前にいちばんなついていたよな？」

「ええ、まあタウベイにもはい。でも、それが何か?でもコイキングはボスでもいりませんよ」

「そのボスがこの間進化してギャラドスに進化したそうだ」

「え!本当ですか？」

「本当だ、こんなところで嘘ついてどうする?」

「それを私に？」

「ああ、そのギャラドスが訓練生になつかず、暴れまくってな。と

りあえずこのギャラドスをまた面倒見てくれないか？」
「いいですけど」
「じゃあこのギャラドスを支給する」
「は、はい」

くニビシティ付近のとある池く

「出て来いギャラドス！」
「ゴオオオオオオツ！」
「久しぶりだな！」
「ゴオオオオツ（久しぶりだな）！」
「これが俺の今のポケモンだ」
「ベイ！」
「ダネ！」
「ゴオオオツ（よろしく）」
「ベイベイ（また会えるとはな）」
「ダネダネダー（よろしく）」
「そうか、フシギダネとギャラドスは初対面なのか」
「ゴオオオオツ（こいつらの実力を見してくれないか）？」
「いいよな、お前達？」
「ベイ（ああ）」
「ダネ（ああ）」
「じゃあこの池にすんでるポケモンと勝負させる！」
そしてシヨウはそこら辺に転がっていた釣竿を使った。
「き、来たぞ！あれはトサキントだ！」
「トサキントサキン！」
「まずはお前タツベイ！」
「ベイ」
「タツベイ、ずつきだ！」
「ベイベイベーツ！」

ズガアアン

「クリーンヒットしたぞ」

「トサキン」

「おっ、つのでつくか・・避けてりゅうのいかりだ！」

「りゅうのいかり直撃だ！」

「ベイ」

「やはりお前が一番だなタツベイ」

「ベイ(うん)」

「ゴオオツ(やるな)」

「じゃあ次はフシギダネだ、相手は・・こいつだ」

シヨウはまたトサキントを釣り上げた。

「ま、またか・・まあいい、フシギダネ、つるのムチだ！」

「ダネーッ」

ビシッ

「そして、そのままはっぱカッター！」

ビシユシユシユ

「ト・・サキン・・」

フシギダネは完勝した。

「さすが、くさタイプはみずタイプには楽勝だな」

「ダネ(うん)」

「ゴ、ゴオオオオツ(じゃあ、俺とやらないか)?」

「まあ、まで二匹とも。今俺らがやらないといけない相手はロケッ

ト団の敵のみ」

「ベイベイ(そうだ)」

「ダネダネダ(それは言ってる)」

「ベイベイ(これから俺らは何をする)?」

「何をするかだと?」

「ベイ(うん)」

「決まってるだろ、サカキ様が目指している世界最強のポケモン軍団の一員になるためにサカキ様のミッションをクリアし、そして各

地のジム戦に勝ち進んでいかなければいけない」

「ダネダネ（俺らだけでいけるか）？」

「だから、お前らを成長させ、各地を回っている時に強いポケモンをゲットし俺の仲間にする」

「ダネダネ（次の目標はどこ）？」

「ここからだ、ハナダかな」

「ベイベイベ（ハナダジムはどんなポケモンを使ってくるんだ？）」

「みずタイプだな」

「ダネダネ（じゃ俺の順番だな）」

「まあそういうことになるが・・・」

「ダネダネ（どうしたの）？」

「サカキ様からの命令しだいでは変更もありうる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7979d/>

ロケット団員の旅

2010年10月9日22時16分発行